

も ばら きた はら い せき
茂原北原遺跡
(B区)

平成25年12月

宇都宮市教育委員会

序

本遺跡の周辺には、飛鳥時代の「評家」の遺跡と推定されている西下谷田遺跡や奈良時代の河内郡の役所跡と考えられている上神主・茂原官衙遺跡など、当時、この地域が古代河内郡の中心であったことを示す遺跡が所在しています。

本遺跡内でもこれまでに道路拡幅工事等において古代の竪穴住居跡が確認されており、同時代の集落跡が存在していることが判明していました。

今回、集合住宅の建設に伴い影響を受けることとなった本遺跡の取扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。その結果、古代の竪穴住居跡が3軒確認され、官衙周辺に所在した一般集落の一部を記録保存することができました。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方々がさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました。地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 12 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

例 言

1. 本書は、橋本県宇都宮市茂原町字茂原に所在する「茂原北原遺跡（B区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、鈴木常男氏による集合住宅建設に伴うもので、同氏の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体者とし、調査実務は同氏より委託を受けた株式会社日本商業史研究所がこれにあたった。
3. 調査は、平成25年8月26日～同年9月12日まで野外調査を実施し、整理・報告書作成作業は同25年12月29日まで行った。
4. 野外調査は水野順敏が担当し、整理・報告書作成作業は新井 潔・水野順敏が行い、鈴木智子の協力を得た。
5. 調査組織

調査主体者・宇都宮市教育委員会	調査実務者・株式会社日本商業史研究所
水越 久夫 教育長	菅間裕二 代表取締役
赤石澤 亮 文化課長	水野順敏 調査担当者（日本考古学会々員）
富川 努 文化課文化財保護グループ係長	新井 潔 整理担当者（ 同 上 ）
今平 利幸 文化課文化財保護グループ	

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の機関、各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する。
橋本県教育委員会文化財課、大東建設㈱、塚田建材㈱、㈱ダイショウ、榎山真司土地家屋調査士事務所、鈴木常男

(敬称略、順不同)

8. 調査参加者

磯崎恵子、澤田邦子、諏訪白虎、高島勝征、高島典子、高田延子、高松米子、中尾忠治、福田重信、野宮 準、森田幸江

(敬称略、順不同)

凡 例

1. 本遺跡の略号は、U（宇都宮）-MBK（茂原北原）-B（B区）で、各遺構の略号はSI（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、P（小穴）、PT（竪穴内の小穴）である。
2. 第4図は、文献11の第2図を複製加筆、第5図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「上三川」「壬生」を部分複製し加筆した。
3. 遺構実測図の縮尺は60分の1を基本とし、カマドは縮尺30分の1、調査区全体図の縮尺は100分の1である。遺物実測図は3分の1を基本とする。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図、断面図の水準線の数値は、海拔標高を示す。
5. 挿入の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□の前が住居番号、後が遺物番号である。
6. 遺構図面で使用したスクリーン・トーンは以下の通りである。

 カマドの範囲  カマド構築材  焼土・焼面

目 次

序	
I はしがき	
1. 調査に至る経緯	7
2. 調査の経過と概要	8
3. 調査の方法と基本層序	8
II 遺跡の位置と環境	
1. 地理的環境	11
2. 歴史的環境	11
III 遺構と遺物	
1. 竪穴住居跡	13
2. 掘立柱建物跡	21
3. 土坑	21
IV 総括	23

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表

第3表 SI-03 出土遺物観察表

第2表 SI-01・02 出土遺物観察表

挿 図 目 次

第1図 試掘調査図

第8図 SI-01 出土遺物

第2図 調査区全体図

第9図 SI-02

第3図 基本層序

第10図 SI-02 出土遺物

第4図 遺跡周辺の地形区分

第11図 SI-03・カマド

第5図 遺跡の位置と周辺遺跡

第12図 SI-03 出土遺物

第6図 SI-01・カマド

第13図 SB-01

第7図 SI-01

第14図 SK-04・06, P-01

図版目次

- 図版1 A. 遺跡遠景(北東より) B. 調査前調査区全景(南より) C. 調査区全景(南西より)
D. 調査区全景(北西より)
- 図版2 A. 調査区近景(西より) B. 調査区近景(北西より) C. SI-01完掘(南より) D. SI-01旧床面(右側・南より) E. SI-01掘方土層(南より) F. SI-01カマド土層(南より) G. SI-01カマド完掘(南より) H. SI-01カマド掘方(南より)
- 図版3 A. SI-02土層(南より) B. SI-02土層(東より) C. SI-02完掘(南より) D. SI-02掘方・SB-01(南より) E. SI-02(手前・北西より) F. SI-02出土須恵器(南より) G. SI-03土層・SK-04(右上・南東より) H. SI-03完掘・SK-04(右上・南東より)
- 図版4 A. SI-03掘方・SK-04(右上・南より) B. SI-03カマド土層(南東より) C. SI-03カマド完掘(南より) D. SI-03カマド掘方(南より) E. SI-03貯蔵穴土層(西より) F. SI-03貯蔵穴(南より) G. SB-01完掘(南より) H. SB-01イ-1土層(南より)
- 図版5 A. SB-01イ-2土層(南より) B. SB-01イ-3確認状況(西より) C. SB-01ロ-1土層(南より) D. SB-01ハ-1土層(南より) E. SK-04土層(南より) F. SK-06土層(東より) G. SK-06完掘(東より) H. 基本層序(西より)
- 図版6 住居跡出土遺物(1) SI-01・02
- 図版7 住居跡出土遺物(2) SI-02・03

I はしがき

1. 調査に至る経緯と経過

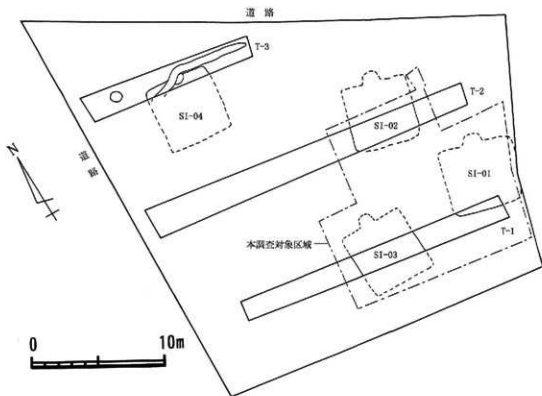
平成 25 年 3 月 19 日付で、鈴木リツ氏より茂原町字北原 906 番 1.907 番 1 の茂原北原遺跡（県番号 4308）内で集合住宅建設に伴い、文化財保護法 93 条の届出が提出された。3 月 21 日付で市教育委員会文化課から県教育委員会文化財課（以下県文化財課）へ進達し、これに対し、県文化財課より確認調査の必要があるとの指示が 3 月 22 日付であったため、事業者代理人である大東建託㈱と協議し、確認調査を実施することになった。

確認調査は、5 月 1 日に実施した。調査の方法は、開発区域内の建物等により掘削が及ぶ範囲に幅 2 m の試掘溝を 3 本設定し（T-1～T-3）、深さ 20～30cm の表土部分を重機により掘り下げ、遺構の確認を行った。その結果、T-1 で堅穴住居跡 2 軒、T-2 で堅穴住居跡 1 軒、T-3 で堅穴住居跡 1 軒、土坑 1 基、溝状遺構 1 条を確認した。

この調査結果を踏まえて、新たに事業者となった鈴木常男氏並びに代理人である大東建託㈱と協議を行い、その後の対応を検討した結果、当初計画より掘削範囲を極力減らし、遺構が保護できない部分の 173㎡分を本調査することとなった。

その後、調査の担当が㈱日本竊業史研究所と決まり、8 月 23 日付で事業者である鈴木常男氏と宇都宮市教育委員会教育長水越久夫の間で調査に関する覚書を交わした。

発掘調査は、市教育委員会が調査主体となり、調査実務を㈱日本竊業史研究所が行った。調査期間は、平成 25 年 8 月 26 日から 9 月 12 日の約 20 日間である。9 月 12 日に野外調査はすべて終了した。



第 1 図 試掘調査図

2. 調査の経過と概要

調査は開発予定地約500㎡のうち、現状保存が不可能な約170㎡に対して実施した。8月26日に調査区設定、調査前の写真撮影を行う。

8月27日より重機による表土除去、仮設施設の設置を行い調査に着手した。その後、人力による遺構確認作業を行い、試掘確認調査の際に見出されていた3軒の堅穴住居跡(SI-01～03)を確認した。SI-01・03は全体が調査区内に所在し、02は北端が調査区外に延びていた。また、SI-02の東壁際に径80cm程の土坑を2基確認したが調査の進捗に伴い、掘立柱建物跡(SB-01)の柱掘方であることが判明した。さらに、SI-01の南側に確認した長方形の土坑は耕作に伴う掘り込みであり、最終的に土坑と判断し得たのはSI-01の南東の円形土坑(SK-06)と、SI-03の東壁と重複する楕円形の土坑(SK-04)の2基のみであった。

SI-01は東西に長い長方形で北壁の中央東寄りにカマドが設けられ、西に拡張されたと考えられた。SI-02は前述の如く、北辺が調査区外に延びているものの、東西にやや長い方形と推定され、埋積土の状況から北壁にカマドが設けられていたと考えられる。また、床面に幾分凹んだ部分が認められ、調査の進捗に伴い、本跡に先行する掘立柱建物跡(SI-01)の柱掘方であることが確認された。SI-03は、南辺が不明瞭であったが、耕作により切られているものの、かろうじて南東・南西の隅が遺存し、全体の規模・形状を知り得た。

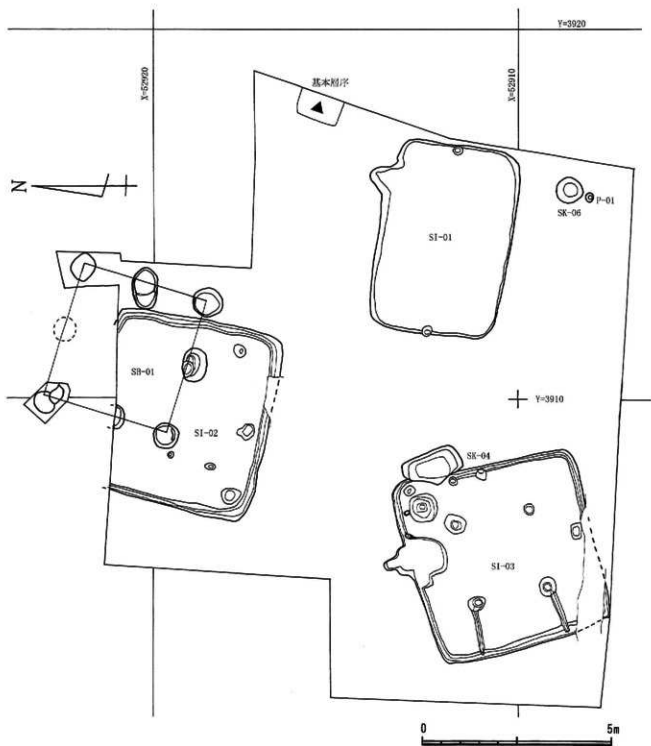
9月3日宇都宮市教育委員会の終了確認を受け、9月11日に垣戻し作業、同月12日に仮設・器材の撤去を行い、すべての野外調査を終了した。整理・報告書作成作業は同年11月1日より着手し、25年12月29日に終了した。

3. 調査の方法と基本層序

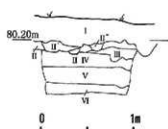
調査は重機(バックホウ・0.25㎡)を使用して厚さ20cm程の表土(耕作土)を除去した後、人力による遺構確認作業を行った。確認した遺構は、住居跡は十文字の土層観察用畦、土坑類は半載により埋積土を除去し、土層を記録の後完掘して写真撮影・実測を行った。その後カマド、床面下(掘方)の調査を行い、再度写真撮影・実測を行った。実測は、造方実測と平板実測を併用し、全体図は縮尺100分の1、カマドは縮尺10分の1、その他は縮尺20分の1で作成した。調査の記録は、当初任意のグリッドを使用した。これを公共座標(世界測地系=JGD2000及び日本平面直角座標=第Ⅸ系)と合致させた。

写真撮影は、35mm版の白黒・カラーライドフィルムで行い、デジタルカメラで補足した。撮影には三脚及び大型脚立を使用した。

調査区はほぼ平坦であるが、本来は東と南に向かって僅かに下降していたと推察される。基本層序として調査区北東部における柱状土層図を第3図に示した。西側では表土(耕作土)層直下がローム層となっていたが、東側では一部ローム漸移層の見られる所もある。



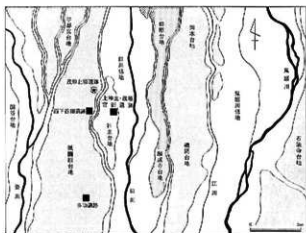
第2图 调查区全体图



第3图 基本层序

基本层序

- I. 赤土(黑褐色土)
- II. 暗褐色土(10YR3/3), コーム粒(1~2mm)少量含む
- III. 暗褐色土(10YR3/3), コーム粒(1~2mm)15%含む
- IV. 暗褐色土(10YR6/1)5%含む(II層が底面を受ける)
- V. 深灰色土(10YR6/2), コーム粒・瓶(1~20mm)15%
- VI. 灰黄褐色土(10YR5/4), 明黄褐色土(10YR5/6)粒・瓶(1~30mm)30%含む
- VII. 明黄褐色土(10YR5/6)
- VIII. 黄褐色土(2.5YR5/4), 明黄褐色土(10YR5/6)粒・瓶(1~30mm)20%含む



第4図 遺跡周辺の地形区分



第5図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1:25,000)

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境 (第4図)

遺跡は、栃木県宇都宮市茂原町宇茂原に所在する。宇都宮市の市街地の南方約8km、市域の南西端に位置し、南側1.5kmに上三川町、西側0.7kmに下野市と隣接する。

栃木県は関東平野の北端に位置し、東は茨城県、北が福島県、西は群馬県、南が埼玉県と隣接する。また、東・北・西の三方を山地に囲まれ、その中央部を南北方向に平地部が延びる。この平地部は鬼怒川、那珂川等の河川の流域となっており、宇都宮市の東寄りを見れば鬼怒川が南流し、市域の中央部にはその水系の田川、西寄りには同じく姿川が南流している。これらの河川に沿って、低地と宇都宮・祇園原、田原、宝木、岡本・宝積寺等の台地が南に向って細長く伸び、各台地は中・小の河川により樹枝状に開折されている。

本遺跡は、巨視的には田川低地と姿川低地に挟まれた、宇都宮・祇園原台地の東縁に位置するが、田川の旧河道を隔てた西方には鳥居の神主台地が所在している。今次調査区付近の標高は80m程で、これより東に向って緩やかに下降している。旧河道沿いの低地は水田として利用されており、畑地として利用されていた調査地との比高は約15mであった。

交通的には、JR東日本東北本線雀宮駅の南南東約2kmに位置し、西方約250mを東北本線及び東北新幹線、同約470mを国道4号線が南北に延び、さらに南方約3kmを北関東横断自動車道路が東西に、東方約2.8kmを新4号国道が南北に走り、北方約3kmを宇都宮環状線(国道121号線)が東西に通る。三者の交わる東北東方約2.9kmに上三川・宇都宮インターチェンジが設けられており、自動車交通の要衝である。

このような状況から、インターチェンジ周辺では大規模な土地区画整理事業が実施され、大型商業施設や各種事業所が進出し、住宅街も形成されている。さらに、南方約3kmには宇都宮市と近隣の自治体が合同で建設した大規模ゴミ処理施設クリーンパーク茂原が所在するなど、のどかな田園地帯も様替わりしている。

2. 歴史的環境 (第5図、第1表)

本遺跡の所在する宇都宮市南部から南隣りの上三川町、西隣りの壬生町、南西の下野市にかけては県内でも指折りの遺跡密集地である。

また、近年は前述の如き交通網の整備や土地区画整理事業などの大規模開発に伴う発掘調査が実施され、その実態が明らかになれつつある。

尚、田川低地の両岸に所在する近隣の遺跡を概観すると、その殆んどが古墳もしくは古墳時代～平安時代の集落跡であり、古墳時代以降この低地を生産基盤とする開発が進行したものと推察される。

古墳は、前期の前方後方墳である権現山古墳群(32)、大日塚古墳(33)、愛宕塚古墳(35)から、中期の大形前方後円墳の笹塚古墳(25)、塚山古墳(図外)へと変遷し、後期には前方後円墳、円墳、方墳からなる群集墳が各所に多数点在するようになる。該期の集落跡は砂田遺跡(12)、砂田姥沼遺跡(13)、中島笹塚遺跡(14)、立野遺跡(17)、磯岡遺跡(18)、権現山遺跡(21)など大規模な遺跡が低地の左岸に集中して見られ、これらは平安時代まで継続する。

これに対し本遺跡の立地する低地の右岸では、北方の雀宮東浦遺跡(7)、雀宮駅東遺跡(6)、牛塚東遺跡(5)、南方の西の前遺跡(42)、前畑遺跡(41)、小蓋遺跡(37)、江連遺跡(36)、愛宕塚東遺跡(34)など奈良時代になって形成されたと推察される遺跡が集中する。

律令制下における当地は下野国河内郡に属していた。下野国は東山道に属し、延喜式では9郡を管する上国

であった。当国の中心となる国府は西隣りの都賀郡（現栃木市）に所属し、国分二寺も同郡（現下野市）に設けられていた。『和名類聚抄』によれば河内郡は11郷を管する中郡であるが、古代東国仏教の要として日本三戒壇の一つが設置された下野薬師寺（現下野市）が建立されていた。国府・国分寺の設置にあたっては、中央政権との関係により旧勢力の根拠地を避けるとの見方も否めないが、いずれにせよ都賀・河内の両郡が下野国の中心地であったであろうことは疑う余地が無いであろう。

当河内郡の中心たる郡衙（家）は、本遺跡の南南東方約1km、宇都宮市と上三川町に跨って所在する国指定史跡の「上神主・茂原官衙遺跡」(38)及び南方約4km、上三川町に所在する多功遺跡に比定される。殊に上神主・茂原官衙遺跡は8世紀前半で政庁が消滅し、倉院のみとなることが調査で確認されたが、多功遺跡では未だ政庁が確認されておらず疑問を残す。さらに、本遺跡の南方約1km、前記の上神主・茂原官衙遺跡の西方約0.8kmに所在する西下谷田遺跡（40）は初期官衙（評家）もしくは豪族の居宅と見られるもので、この遺跡から上神主・茂原官衙遺跡への移行が推定されている。

このような環境における本遺跡及び低地右岸の集落跡は官衙周辺集落として、律令期に入って発生したものと推察される。

第1表 周辺遺跡一覧表

No	県通番号	市番号	遺跡名	種別	時期等
1	4308	243	茂原北原遺跡	集落跡	奈良時代
2	4307	234	多功神塚古墳群	古墳群	古墳時代
3	4306	233	宇都宮機器南遺跡	集落跡	古墳時代
4	4305	221	牛塚古墳	古墳	古墳時代（前方後円墳）中期末～後期初（遷滅）
5	4304	214	牛塚東遺跡	集落跡	奈良時代
6	4303	213	雀宮駅東遺跡	集落跡	奈良時代
7	4301	212	雀宮東遺跡	集落跡	奈良時代
8	4300	209	綾女塚古墳	古墳	古墳時代
9	4299	208	十里木古墳	古墳	古墳時代
10	4194	403	曾西南遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
11	4192	207	曾西遺跡	集落跡	古墳時代
12	3386	406	砂田遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
13	4356	447	砂田姥沼遺跡	集落跡	古墳～平安時代
14	4355	448	中島管塚遺跡	集落跡	古墳～平安時代
15	4357	210	赤沢高塚群	高塚	江戸時代
16	4359	211	李内遺跡	集落跡	奈良時代
17	4358	451	立野遺跡	集落跡	古墳～平安時代・中世
18	4360	449	磯岡遺跡	集落跡	古墳～平安時代
19	4361	450	琴平塚古墳群	古墳群	古墳時代（前方後円墳他）
20	4372	222	桜橋古墳	古墳	古墳時代
21	4371	455	徳現山遺跡	集落跡	古墳～平安時代
22	4373	223	杉村遺跡	集落跡	奈良・江戸時代
23	4375	456	原遺跡	集落跡	古墳～平安時代
24	4374	224	双子塚遺跡	古墳	古墳時代（前方後円墳他）
25	4377	235	笹塚古墳	古墳	国指定史跡、古墳時代中期（前方後円墳）
26	4378	240	鴨脚塚古墳	古墳	古墳時代中期、円墳（遷滅）
27	4380	239	松の塚古墳	古墳	古墳時代
28	4376	237	鹿古墳群	古墳群	古墳時代
29	4379	238	徳現塚古墳群	古墳群	古墳時代
30	4381	236	東塚古墳群	古墳群	古墳時代
31	4309	241	徳現山北遺跡	集落跡	旧石器・弥生・古墳～平安時代
32	4310	242	徳現山古墳群	古墳群	古墳時代前期（前方後円墳他）
33	4314	246	大日塚古墳	古墳	古墳時代前期（前方後円墳）
34	4313	248	愛宕塚東遺跡	集落跡	古墳～奈良時代
35	4315	247	愛宕塚古墳群	古墳群	古墳時代前期（前方後円墳他）
36	4319	251	江連遺跡	集落跡	奈良時代
37	4318	250	小笠遺跡	集落跡	奈良時代
38	4321	452	上神主・茂原官衙遺跡	官衙跡	国指定史跡、古墳～奈良時代
39	4320	468	茂原内原遺跡	集落跡	奈良・平安時代
40	4317	467	西下谷田遺跡	官衙跡	古墳～奈良時代
41	4316	249	前畑遺跡	集落跡	奈良時代
42	4312	245	西の前遺跡	集落跡	奈良時代

III 遺構と遺物

今次調査区で確認した遺構は古代の堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡1棟、土坑2基である。遺物は全体に少なく、小破片となったものが目立つが、土師器を主体とし、須恵器、屋瓦なども少量認められた。

1. 堅穴住居跡

SI-01

遺構 (第6・7図, 図版2)

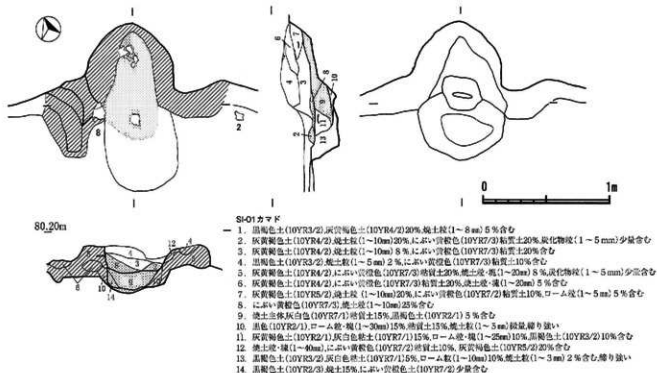
調査区の南東に位置し、北約2.5mにSI-02・SB-01、西約3mにはSI-03、南約1mにSK-06が隣接する。平面は、東西長5.1m、南北長3.5mの東西に長い長方形である。北壁のカマドを通る主軸方はN-12°-Eを示す。壁は現存高15cm程で、ほぼ直立する。壁下には壁溝を確認できなかった。床面は粗掘りの後、ローム主体の土で埋戻した貼床であるが、西半部に比べ東半部の方が堅く締っていた。また、東半部には床の硬化面が認められることから、本来は東半部の一辺3.3m程の方形であったものを西に約1.8m拡張した可能性が高い。最終時の支柱穴は長軸線上の東・西に接して設けられたPT-1・2の2本と考えられる。径25~30cm、深さ22~32cmで、ともに内傾して穿たれていた。拡張前の支柱穴は確認できなかった。

カマドは北壁の東寄りに、幅80cm、奥行50cmの半円形に掘り込み灰色粘土で築かれていた。住居の廃絶に伴い破壊されたものか、支脚は遺存せず、袖部の遺存状態も悪い。

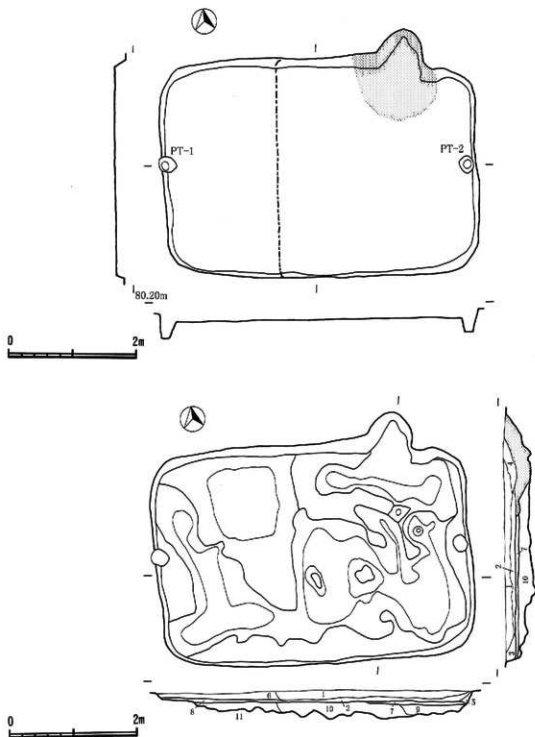
埋積土は11層に分けられ、自然埋没と考えられるが、西半部にはにぶい黄橙色土の混入が多く、疑問を残す。

遺物 (第8図, 図版6)

カマド付近より土師器壺、台付壺、女瓦、埋積土中より、土師器杯、須恵器杯・甕などが出土したが、いずれも小片で図示し得るものは少なかった。



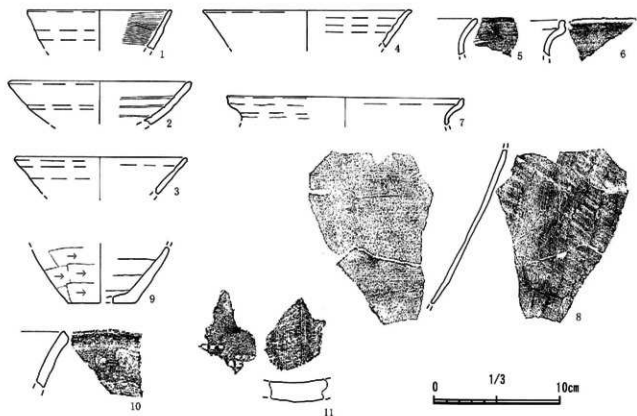
第6図 SI-01・カマド



SI-01

1. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒(1~10mm)10%, β 土粒(1~5mm)3%,灰褐色土(10YR4/2)30%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒(1~10mm)15%, β 土粒(1~5mm)8%含む
3. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒(1~8mm)35%含む
4. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒(1~10mm)10%, β 土粒(1~8mm)5%,灰白色土(10YR6/1)20%含む
5. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒・塊(1~3mm)37%含む
6. 灰青褐色土(10YR4/2), α -A粒・塊(1~30mm)20%,黒褐色土15%含む
7. 黒褐色土(10YR3/2), α -A粒・塊(1~30mm)15%, β 土粒・塊(1~30mm)10%含む,黒煤跡
8. 灰青褐色土(10YR4/2), α -A粒・塊(1~50mm)20%含む,黒煤跡?
9. 黒褐色土(10YR3/1), α -A粒・塊(1~60mm)25%,灰青褐色土(10YR5/2)10%含む,黒煤跡
10. 灰青褐色土(10YR5/2), α -A粒・塊(1~150mm)45%,黒褐色土(10YR3/2)25%含む
11. 灰青褐色土(10YR4/2),黒褐色土(10YR3/2)10%, α -A粒・塊(1~80mm)10%含む

第7図 SI-01



第8図 SI-01 出土遺物

SI-02

遺構（第9図、図版3）

調査区の北端に位置し、北端部は調査区外に延びる。SB-01と重複し、これを切る。南辺の中程が現代の掘り込みによって切られていた。

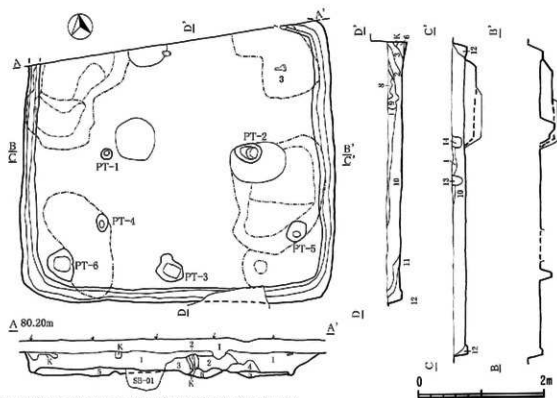
平面は東西長5m、東辺での南北長4.4mの東西にやや長い方形である。北壁に築かれていると判断されるカマドを通る主軸方位はN-10°30'-Eと推定される。壁は現存高20cmでほぼ直立する。壁下には幅15～25、深さ5cm程の壁溝が設けられていた。本来はカマド部分を除き圍繞すると考えられる。床面は粗掘りの後、ローム主体の土で埋戻して貼床しており、全体に堅く締っていた。各隅や壁際に床下の掘り込みが設けられ、ローム粒・塊主体の土で埋戻されていた。小穴は数口認められたが、主柱穴は長軸線上に設けられたPT-1・2の2口と考えられ、径18～40cm、深さ20cmであった。尚、PT-2はPT-1と異なり楕円形で2段に掘り込まれていた。これは、先行するSB-01の柱掘方ロ・1と重複していることに関連するものであろうか。本跡の柱穴との重複が無いハ・1は上面に貼床を施したのみであったが、ロ・1の上部は床下の掘り込みとの重複によってローム粒・塊主体の土で埋込まれた後にPT-2が掘られていた。また、南壁際に認められたPT-3は位置的に出入口に関連する施設と考えられる。

カマドは前述の如く確認できなかったが、北を除く三方の壁に認められず、調査区北端の埋積土中にカマドの存在を推察させる堆積土が認められたことから、北壁の中程に築かれていたと判断される。

埋積土は14層に分けられたが、ローム粒・塊を多く含み、人為的埋没と考えられる。

遺物（第10図、図版6・7）

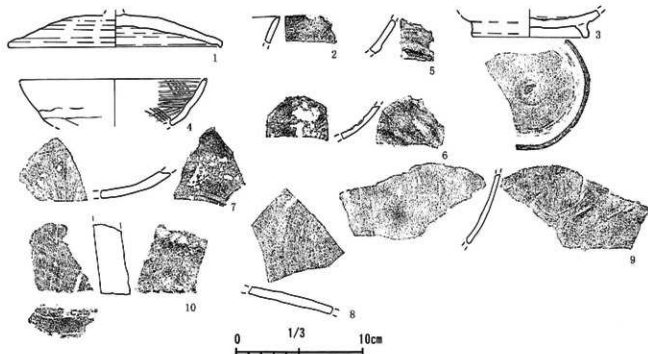
出土遺物は少なく、北東隅の埋積土中よりほぼ完形の須恵器蓋（1）、高台坏の底部片（3）が出土した他、土師器坏（4・5・6・7）、甕（9）、須恵器坏（2）、甕もしくは蓋（8）、男瓦（11）なども見られたが、全てが小片であった。



SI-02

1. 黒褐色土(10YR3/1)、ローム殻・塊(1~40mm)20%、黒色土(10YR2/1)10%含む(人為的埋没)
2. 黒褐色土(10YR3/2)に赤い黄褐色粘土(10YR7/2)殻・塊(1~40mm)30%、明赤褐色土(2.5YR5/6)殻・塊(1~30mm)10%、黒色土(10YR2/1)殻・塊(1~30mm)5%含む
3. 黒褐色土(10YR3/2)に赤い黄褐色粘土(10YR7/2)殻・塊15%、明赤褐色土(2.5YR5/6)殻(1~10mm)10%、ローム殻(1~10mm)10%含む、カマド屑土
4. 赤い黄褐色粘土(10YR7/2)、明赤褐色粘土(10YR7/6)15%、ローム殻・塊(1~30mm)13%、黒褐色土(10YR3/2)15%含む
5. ローム殻・塊(1~10mm)主峰、灰質褐色土(10YR4/2)20%、黒褐色土(10YR3/2)10%含む、陥没層
6. 黒褐色土(10YR3/2)、焼土殻(1~10mm)15%、ローム殻(1~10mm)10%、赤い黄褐色粘土(10YR7/2)10%、炭化焼殻(1~3mm)少量含む
7. ローム殻・塊(1~50mm)主峰、黒褐色土(10YR3/2)20%、赤い黄褐色土(10YR7/2)殻・塊(1~30mm)10%、焼土殻(1~10mm)少量含む、漆塗層
8. 黒褐色土(10YR3/1)、ローム殻(1~2mm)3%、赤い黄褐色土(10YR7/2)殻(1~3mm)8%含む
9. 赤い黄褐色土(10YR7/3)、黒褐色土(10YR3/1)40%、ローム殻(1~10mm)5%含む、カマドの屑土か?
10. 黒褐色土(10YR3/1)、ローム殻・塊(1~40mm)20%、灰質褐色土(10YR4/2)15%含む
11. 黒褐色土(10YR3/1)、明赤褐色土(10YR5/2)20%、ローム殻(1~3mm)5%含む
12. 灰質褐色土(10YR4/2)、ローム殻・塊(1~30mm)30%、黒褐色土(10YR3/1)15%含む
13. 黒褐色土(10YR3/1)、ローム殻(1~3mm)5%含む
14. 黒褐色土(10YR2/2)、ローム殻・塊(1~20mm)10%含む

第9図 SI-02



第10図 SI-02 出土遺物

10

第2表 SI-01・02 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

№	種別 器種	大きさ (cm)		遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調		出土位置・備考
		口径	高さ 底径			胎土	焼成・色調	
SI-01 1	土師器 杯	口径 器高 底径	(11.4) — —	断片	ロクロ整形、口辺部内面横ミガキ、内面黒色処理	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内 黒色 外 褐色	カマド
SI-01 2	土師器 杯	口径 器高 底径	(14.6) — —	断片	ロクロ整形、体部下半横ヘラ割り	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 不良 内外 黒色・灰褐色	床面
SI-01 3	須恵器 杯	口径 器高 底径	(13.8) — —	断片	ロクロ整形	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 青灰色	埋積土
SI-01 4	須恵器 杯	口径 器高 底径	(16.8) — —	断片	ロクロ整形	胎土 焼成 色調	砂粒混 不良 内外 灰白色・褐色	カマド、内外面磨減
SI-01 5	土師器 台付甗	口径 器高 底径	— — —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 明褐色	埋積土
SI-01 6	土師器 甗	口径 器高 底径	— — —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内 褐色 外 黒褐色	埋積土
SI-01 7	土師器 甗	口径 器高 底径	(19.0) — —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	白色粒混 良 内外 褐灰色・褐色	カマド
SI-01 8	土師器 甗	口径 器高 底径	— — —	断片	輪積み、内面横ナデ、外面上半横ヘラ割り、下半横ヘラ割り	胎土 焼成 色調	白色粒混 良 内外 暗赤灰色	カマド
SI-01 9	土師器 甗	口径 器高 底径	— — (5.4)	断片	輪積み、内面横ナデ、外面横ヘラ割り	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内 褐色 外 黒色	カマド
SI-01 10	須恵器 甗	口径 器高 底径	— — —	断片	ロクロ整形	胎土 焼成 色調	砂粒混 不良 内外 灰白色	埋積土
SI-01 11	瓦 女瓦	口径 器高 底径	— — —	断片	凹面に布目、凸面格叩き	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良 内外 白灰色	カマド
SI-02 1	須恵器 甗	口径 器高 底径	17.1 — —	70%	ロクロ整形、甲はヘラ割り	胎土 焼成 色調	白色砂混 良 内外 灰色	埋積土
SI-02 2	須恵器 杯	口径 器高 底径	— — —	断片	ロクロ整形	胎土 焼成 色調	白色砂混 良 内外 暗青灰色	埋積土
SI-02 3	須恵器 高台杯	口径 器高 高台径	— — (9.3)	30%	ロクロ整形、底部ヘラ割り後付高台	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 褐色	床面
SI-02 4	土師器 杯	口径 器高 底径	(14.8) — —	断片	縦作り、口辺部内外面ミガキ、底部ヘラ割り、内面黒色処理	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内 黒色 外 黒色・にぶい黄褐色	埋積土
SI-02 5	土師器 杯	口径 器高 底径	— — —	断片	内面ミガキ、底部外面ヘラ割り、内面黒色処理	胎土 焼成 色調	砂粒混 不良 内外 黒色・灰白色	埋積土
SI-02 6	土師器 杯	口径 器高 底径	— — —	断片	内面ミガキ、底部外面ヘラ割り、内面黒色処理	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 褐色・褐灰色	埋積土
SI-02 7	土師器 杯	口径 器高 底径	— — —	断片	内面放射状ミガキ、底部外面ヘラ割り	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 褐色・褐灰色	埋積土
SI-02 8	須恵器 甗 or 甗	口径 器高 底径	— — —	断片	ロクロ整形	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良 内 灰白色 外 オリーブ黒色	埋積土
SI-02 9	土師器 甗	口径 器高 底径	— — —	断片	内面横ヘラナデ、外面ヘラ割り	胎土 焼成 色調	白色粒混 良 内 明褐色 外 にぶい褐色	埋積土
SI-02 10	瓦 男瓦	口径 器高 底径	— — —	断片	凹面に布目、小口一面化粧、凸面ナデ	胎土 焼成 色調	白色砂粒混 良 内外 にぶい黄褐色	埋積土

SI-03

遺構（第11図、図版3・4）

調査区の南西に位置し、東約3mにSI-01、北約4mにSI-02が隣接する。北東部がSK-04と重複しこれに切られていた。また、南辺の大部分は耕作痕によって切られるが、東と西の隔は確認し得た。

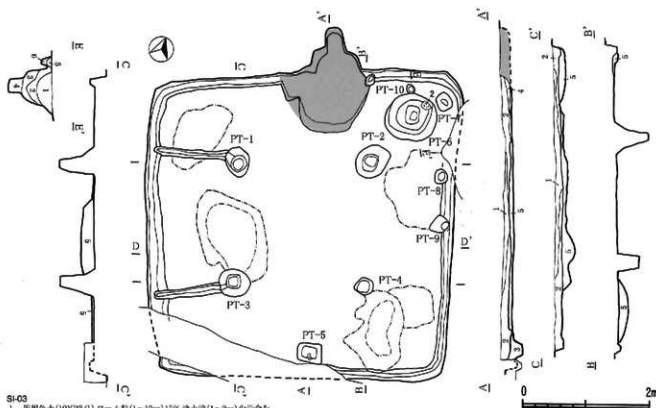
平面は東西長4.7m、南北長4.9mのほぼ方形である。北壁のカマドを通る主軸方位はN-12°30'-Wを示す。壁は現存高15cmでほぼ直立する。壁下には幅15～25cm、深さ5cm程の壁溝が設けられ、カマド部分を除き圍繞すると思われる。また、PT-1・3から西壁下の壁溝に向けて、幅12～15、深さ8～15cmの所謂間仕切溝がそれぞれ設けられていた。間仕切溝は底面が壁際の西から柱穴の東に向かって下降していた。床面は粗掘りの後、ローム粒・塊主体の土で埋戻した貼床で、全体に堅く締り、ほぼ平坦であった。壁寄りには床下の掘り込みが認められた。小穴は10口程確認したが、支柱穴はPT-1～4の4口で、1～3は上部がロート状に広がり径45～55cm、下位はいずれも径20～25cm、床面からの深さは35～55cmであった。また、南壁際のPT-5は位置的に出入口に関連する施設と考えられ、土師器甕の口辺部片（3）が出土した。

北東隅には貯蔵穴と見られるPT-6がある。2段に掘り込まれており、上面が径65cmのほぼ円形、深さ35cmの底面中央に22×28cmの長方形で、深さ25cmの掘り込みが設けられていた。貯蔵穴内には焼土及び粘質土など、カマドに関連すると思われる埋積土が見られた。埋積土上位の北壁際にほぼ完形の土師器の鉢が1点（2）遺存していた。一般的な貯蔵穴では住居の廃絶時には開口していたと考えられる埋積土が認められるが本跡の場合、カマドに関連すると見られる焼土・粘土などが堆積していた。本来開口していたところに廃絶に伴うカマドの破壊によってこれらの土が埋ったものか、存続時にカマドの改造に際して埋られたものかは明確にし難い。また、底面に柱穴状の小穴が穿たれている点も一般的な例とは異なる点であろう。

カマドは北壁のほぼ中央やや東寄りに、幅90cm、奥行80cmの凸字形に切り込み、灰色粘土で築かれていた。住居の廃絶に伴い破壊されたものか、支脚は遺存せず、袖部の残存状態も悪い。カマドの構築材の内外より土師器甕の破片が出土したものの、いずれも小片で図示し得るものは極僅かであった。埋積土は5層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物（第12図、図版7）

前述の如く、貯蔵穴より出土の土師器鉢（2）の他、カマド周辺の土師器甕（6）、南西隅床面の土師器坏（1）などで、図示し得るものは僅かであった。

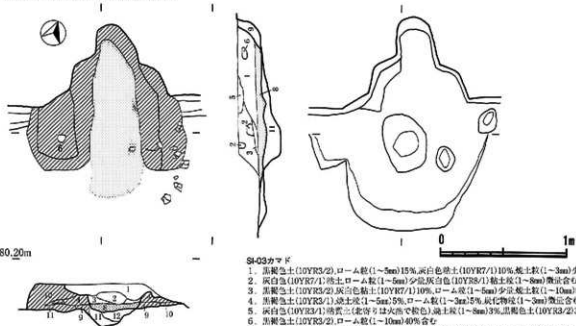


SI-03

1. 黒褐色土(10YR3/1), ローム軟(1~10mm)15%, 焼土段(1~2mm)少量含む
2. 黒褐色土(10YR3/2), ローム軟・硬(1~25mm)20%, 焼土段(1~2mm)3%, 炭化物粒(1~3mm)微量含む
3. 灰褐色土(10YR4/2), 黒褐色土(10YR3/1)30%, ローム軟(1~8mm)10%, 焼土段(1~5mm)微量含む
4. 黒褐色土(10YR3/2), 焼土段(1~8mm)15%, ローム軟(1~5mm)5%含む, ホマドの転踏か?
5. 黒褐色土(10YR3/2), ローム軟・硬(1~120mm)30%, 灰褐色土(10YR5/1)20%含む, 床下の壁面肌層により黒褐色土と灰褐色土の比率が異なる

SI-03PT-10・PT-10

1. 黒褐色土(10YR3/1), ローム軟(1~8mm)10%, 灰褐色土(10YR4/1)25%含む
2. 灰褐色土(10YR5/2), 焼土段(1~10mm)15%, ローム軟・硬(1~20mm)5%, 黒褐色土(10YR3/1)10%含む
3. 灰褐色土(10YR5/2), ローム軟・硬(1~20mm)10%, 焼土段(1~10mm)3%含む
4. 灰褐色土(10YR5/2), ローム軟・硬(1~60mm)15%含む
5. 黒褐色土(10YR3/2), ローム軟(1~10mm)20%, 焼土段(1~5mm)少量含む
6. 灰褐色土(10YR4/2), 黒褐色土(10YR3/2)10%含む

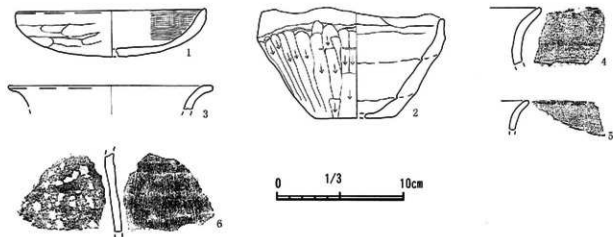


80.20m

SI-03カマド

1. 黒褐色土(10YR3/2), ローム軟(1~5mm)15%, 灰白色粘土(10YR7/1)10%, 焼土段(1~3mm)少量含む
2. 灰白色(10YR7/1), 焼土・ローム軟(1~5mm)少量, 灰白色(10YR8/1), 焼土段(1~8mm)微量含む(砂質)
3. 黒褐色土(10YR3/2), 灰白色粘土(10YR7/1)10%, ローム軟(1~5mm)少量, 焼土段(1~10mm)5%含む
4. 黒褐色土(10YR3/1), 焼土段(1~5mm)5%, ローム軟(1~3mm)5%, 炭化物粒(1~3mm)微量含む
5. 灰白色(10YR3/1), 焼土段(1~5mm)少量, 灰白色(10YR7/1)少量, 焼土段(1~8mm)3%, 黒褐色土(10YR3/2)30%含む
6. 黒褐色土(10YR3/2), ローム軟(1~10mm)40%含む
7. 黒褐色土(10YR3/1), 焼土段(1~10mm)15%, 灰白色粘土(10YR8/1)10%, ローム軟(1~10mm)10%含む
8. 焼土段・硬(1~30mm), 主体黒褐色土(10YR3/1)30%, ローム軟(1~10mm)5%含む(穴底)
9. 灰色(7.5Y5/1), 粘質土にローム軟(1~10mm)15%含む
10. 灰色(7.5Y5/1), 粘質土に黒褐色土(10YR3/1)30%, 焼土段(1~3mm), ローム軟(1~3mm)少量含む
11. 黒褐色土(10YR3/1), ローム軟・硬(1~20mm)25%, 焼土段微量含む
12. 黒褐色土(10YR3/1), 焼土段(1~3mm)5%, ローム軟(1~8mm)5%含む

第11図 SI-03・カマド



第12図 SI-03出土遺物

第3表 SI-03出土遺物観察表

() 鑑定値 [] 現存値

No	種別	大きさ (cm) 口径 高さ 底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調		出土位置・備考
	器種				胎土	焼成・色調	
SI-03 1	土師器 坏	口径 (15.2) — 底径 —	30%	口辺部内外面横ナデ。外面下半 ヘラ削り。内面と外面の一部に ウルシ処理	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 灰白色・黒褐色	埋積土
SI-03 2	土師器 鉢	口径 14.6 器高 8.7 底径 6.4	80%	輪積み、口辺部内外面横ヘラナ デ、体部外面縦ヘラ削り。内面 横ナデ	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 褐灰色・にぶい黄褐色	貯蔵穴。内面種子 圧痕あり
SI-03 3	土師器 甕	口径 (16.4) — 底径 —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 にぶい黄褐色	PT- 5
SI-03 4	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良 内 橙色・にぶい褐色 外 にぶい黄褐色	埋積土
SI-03 5	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 良 内外 にぶい黄褐色	埋積土
SI-03 6	土師器 甕	口径 — 器高 — 底径 —	断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ、 体部内面ナデ、外面縦ヘラ削り	胎土 焼成 色調	砂粒混 良 内外 にぶい黄褐色	カマド

2. 掘立柱建物跡

SB-01

遺構（第13図，図版4・5）

調査区の北東隅に位置し、北端は調査区外に延びる。本跡の規模・形状を確認の為、北側の調査区外において西辺は1か所、東辺で2か所に試掘坑を設けた。その結果、西辺の南より3番目（イ-3）、東辺も南より3番目（ハ-3）の柱掘方の存在を確認したが4番目（ハ-4）は推定位置に認められず、2×2間と判断した。また、東柱にあたるロ-2の柱掘方が確認されないことから側柱式と考えられる。南西部はSI-02と重複しこれに切られていたが、柱掘方の下部が遺存していた。

規模は、南辺（1の列）での東西長360m、東辺（ハの列）で南北長3.3mで、東西長が僅かに長く、東西棟である。長軸方位はN-64°-Wを示す。柱間は1の列西より180+180cm、ハの列南より165+165cmであった。

柱掘方は径60～80cmの円形、深さは重複による削平の無いハ-1・2が60cm程であるが、他の柱掘方の底面は両者より10cm程低い位置にある。尚、この2口の掘方底面には柱当りが認められたが、重複していると思われ、建替えの可能性が高い。埋積土中より土師器片の出土した柱掘方もあるが、いずれも小片で図示し得るものは無かった。

3. 土坑

当初は数値の土坑の存在を想定したが、調査の進捗に伴い、掘立柱建物跡の柱掘方と判明したもの（SK-01・05）や、耕作に伴う掘込み（SK-02・03）などがあり、最終的にはSK-04・06の2基となった。

SK-04

遺構（第14図，図版5）

SI-03の北東部に接して所在し、これを切る。平面は南北長160cm、東西長90cmの南北に長い楕円形である。壁は大きく外傾し、中央での深さは32cm。埋積土は3層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

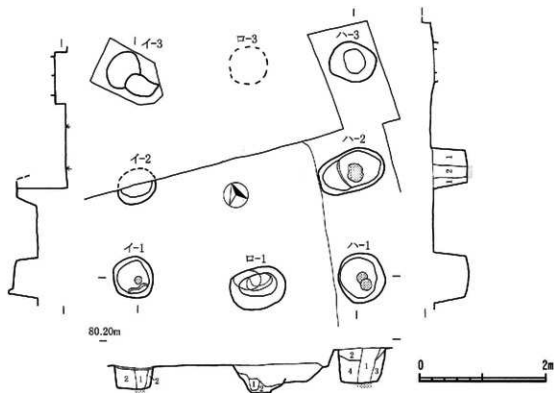
SK-06

遺構（第14図，図版5）

調査区の南東隅に所在し、SI-01の南1mに隣接する。平面は径70cmの円形、深さ30cm程で、壁はやや外傾する。底面は径35cmの円形でほぼ平坦であった。埋積土は3層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物は出土しなかった。

本跡の北約15cmに径25cm、深さ30cmの小穴P-01を確認したが本跡に伴うものではないと判される。



I-1

1. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~5mm)13%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~30mm)25%含む

RO-1

1. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~20mm)25%,灰黄褐色土(10YR6/2)20%,灰白色粘土(10YR8/1)少量含む
2. ローム殻(1~100mm),灰白色土(10YR8/1)少量含む

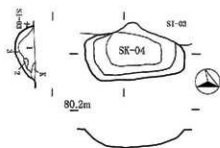
HA-1

1. 灰黄褐色土(10YR4/2),ローム殻(1~30mm)30%,黒褐色土(10YR3/1)15%含む
2. 灰黄褐色土(10YR4/2),ローム殻(1~60mm)40%,黒褐色土(10YR3/1)10%含む
3. 黒褐色土(10YR3/2),灰黄褐色土(10YR4/2)15%,ローム殻(1~30mm)15%含む
4. 灰黄褐色土(10YR4/2),黒褐色土(10YR3/2)20%,ローム殻(1~30mm)20%含む

HA-2

1. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~40mm)25%含む
2. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~2mm)3%含む

第13図 SB-01

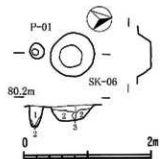


SK-04

1. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~3mm)3%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~3mm)45%含む
3. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~30mm)20%,灰黄褐色土(10YR4/3)20%含む

SK-06

1. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~5mm)10%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~25mm)25%含む
3. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~3mm)5%含む



P-01

1. 黒褐色土(10YR3/1),ローム殻(1~10mm)10%含む
2. 黒褐色土(10YR3/2),ローム殻(1~20mm)20%,炭化物殻(1~5mm)少量含む

第14図 SK-04・06, P-01

IV 総括

今次調査区は約 500m²の開発予定地のうち現状保存が不可能な約 170m²を調査対象としたものである。先に実施した試掘調査では 4 軒の竪穴住居跡が確認され、そのうちの 3 軒が調査区内に所在した。

各々の遺構を概観すると次の如くである。7 世紀末～8 世紀初めと推定される SI-03 は、平面がほぼ方形で、4 柱の主柱穴、壁溝と西側の間仕切溝、北東隅の貯蔵穴、南壁際に出入口の小穴などを備え、北壁のカマドの掘方が凸字形であるなど 3 軒の中では最も古い形態を示す。間仕切溝は西側のみ確認され、それぞれ西壁下の壁溝から主柱穴の PT・1・PT・3へと連なる。用途についてはその名の示す通り、住居内における間仕切りであり、「ネマ」を区画すると推察されるが、その上部構造は未だ明確にし難いのが現状である。県内の間仕切住居について検討した橋本澄朗氏によれば、7 世紀以降の間仕切溝をもつ竪穴住居跡は「7 世紀の事例が多いが、宇都宮市域では奈良・平安時代まで残存する。」とのことであり、間仕切溝があるからといって必ずしも 7 世紀代に限定する必要は無いようである。また、県外でも宮城県築塚遺跡（奈良時代）の例を示している（文献 6）。

尚、出入口の位置想定に関して、茨城県土浦市うぐいす谷遺跡（文献 5）の例を示し、カマドの対面の壁際的小穴は梯子穴との理解の下推定を行っており、本跡の SI-02・03 もこれに従った（文献 6）。

貯蔵穴に関しては、カマドの近くにあることが多いことから食器（土器）、食材等の収納あるいは貯水施設など諸説ある。笹森健一氏は、埼玉県深谷市の城北遺跡で調査された、居住中の被災により一家 4 人が家屋の下敷となって死亡しそのまま廃絶したと考えられる竪穴住居跡の貯蔵穴を示す。「棒状の木材を並べた蓋が被さっていたが内は空だった」ことから貯蔵施設との見方を否定する。氏はカマド（炉）及び出入口と貯蔵穴の組合せにより竪穴内の利用区分について検討し、男・女による使い分け、さらには婚姻形態（集落内の者同志、あるいは集落外から配偶者を迎えての婚姻）をも論考し大変興味深い（文献 12）。また、この中で貯蔵穴には「入口にこだわりの貯蔵穴」と「入口にこだわらない貯蔵穴」があるとし、入口にこだわりの貯蔵穴は縄文時代中期の埋甕や同終末期の柄鏡形住居の系譜上にとらえ「胞衣」の埋納施設の可能性を指摘する。逆に入口にこだわらずカマドの左・右に設けられたものは男性・女性の空間を表したものと見る（文献 12）。これに従えば本遺跡 SI-03 の場合はカマドを左・右の結節点とし、貯蔵穴のある右半部が女性用の空間となる。尚、本跡はカマドに関連する焼土などで埋没し、その上部よりほぼ完形の土師器鉢が出土しており、どの時期にこのような状態となったのか興味深いところである。

8 世紀代と推定される SI-01・02 はともに東西に長く、長軸線上に 2 本の主柱穴をもつ。このうち 01 は、当初方形であったものを西に拡張したと推察され、北壁のカマドは当初の位置で造り替えた為に東寄り到现在し、掘方も半円形で新しい形態を示す。2 本の主柱穴は東・西の壁に接して内傾ぎみに設けられていた。

東半部では建て替え前の床面の一部が遺存したが床面下の掘り込みが著しく、当初の竪穴の範囲や古い柱穴などは確認できなかった。

02 は当初より東西に長い方形で、北壁にカマドが築かれていたと推定されるが、調査区内では明確にし得なかった。竪穴内の長軸線上に 2 本の柱穴、南壁際に出入口の小穴などを備える。SB-01 と重複し、これを切って構築されていた。

全体に遺物の出土量が少なく、小片となったものが多かったが、土師器を主体とし少量の須恵器の他屋瓦片も認められた。屋瓦については南方約 1km の上神主・茂原官衙遺跡との関連が想起される。文字資料や施釉陶器、金属製品などは全く確認できなかった。

SB-01は2×2間の欄柱式で、縦柱式の倉庫形態では無いものの、集落内の倉庫的なものと考えられる。建物の規模の割に柱立掘方が比較的しっかりしており、周辺に本格的な掘立柱建物と接することが多かったものと推察される。

尚、調査区外となったものも含め比較的近接して堅穴住居跡が見られ、SI-02とSB-01の重複はあるものの、堅穴住居跡どうしの重複は見られなかった。第二章で記した田川低地左岸の各集落跡では古墳時代から平安時代にかけて連続と継続することから堅穴住居跡の重複が多く見られる。しかし、本遺跡では7世紀末～8世紀初め頃から集落が営まれ、概ね8世紀代で衰退するように、集落の存続期間が短かったことに起因すると推察される。

このような状況から「官衙周辺集落」と表現することは大変便利な呼称であるが、実際には、外的要因によって計画的（強制的）に配置されたものか、自然発生的に官衙周辺に集落が増加したものは広範囲に発掘調査を実施しなければ判断し難い。殊に今次調査区は僅かに3軒の調査であり、出土遺物も非常に少なく、文字資料や施釉陶器、金属製品などの特種遺物も全く見られなかった。

また、上神主・茂原官衙遺跡では8世紀中頃に瓦葺の正倉が整備されたことが調査によって確認されている。今次調査区においても僅かながら瓦片の出土があり、造営に関わった際に生じた破片類が集落内に持ち込まれたものであろうか。近隣の大規模集落跡では平安期の堅穴住居跡のカマドなどからほぼ完形の女瓦・男瓦などが出土しており、瓦葺施設の廃絶後に持ち込まれたと考えられている。

いずれにせよ、大規模な調査が進んでいる田川低地左岸に比べ本遺跡を含め田川低地右岸の集落跡を考えるには未資料不足の感が否めない。今後の資料の蓄積を持ちたい。

本書の上梓にあたり、調査に対しご理解とご助力を賜りました事業主の鈴木常男様とご家族様はじめ、関係機関ならびに各位に深謝申し上げ筆する。

参考・引用文献

1. 宇都宮市史編さん委員会 1979 『宇都宮市史 第1巻 原始古代編』 宇都宮市
2. 上三川町史編さん委員会 1979 『上三川町史 資料編 原始・古代・中世』 上三川町
3. 高橋一夫 1979 「計画村落について」『古代を考える20』 古代を考える会
4. 木下 忠 1981 『風雲-古代の出産習俗』 雄山閣出版
5. 土生朗治 1994 「うぐいす平遺跡」『（仮称）上高津岡地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書』（財）茨城県教育財団
6. 橋本澄朗 1996 「間仕切住居に関する覚え書」『研究紀要第12号』 栃木県立博物館
7. 栃木県教育委員会 1997 『栃木県埋蔵文化財地図』
8. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』
9. 秋元陽光・保坂知子 1999 『上神主・茂原遺跡Ⅰ』 上三川町教育委員会
10. 安永真一他 2001 『上神主・茂原 茂原向原 北原東』（財）とちぎ生語学習財団埋蔵文化財センター
11. 柴木誠・深谷昇 2003 『上神主・茂原官衙遺跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告書第27集・宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第57集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
12. 佐藤健一 2007 「4 古墳時代から奈良・平安時代の堅穴住居」『住まいの考古学』 学生社



A. 遊歩道 (北東より)



B. 調査前 調査区全景 (南より)



C. 調査区全景 (南西より)



D. 調査区全景 (北西より)



A. 調査区近景 (西より)



B. 調査区近景 (北西より)



C. SI-01 完掘 (南より)



D. SI-01 旧床面 (右側・南より)



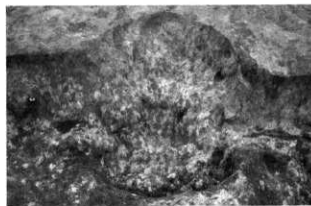
E. SI-01 掘方土層 (南より)



F. SI-01 カマド土層 (南より)



G. SI-01 カマド完掘 (南より)



H. SI-01 カマド掘方 (南より)



A SI-02 土層 (南より)



B SI-02 土層 (東より)



C SI-02 突棚 (南より)



D SI-02 掘方・SB-01 (南より)



E SI-02 (手前・北西より)



F SI-02 出土須臾器 (南より)



G SI-03 土層・SK-04 (右上・南東より)



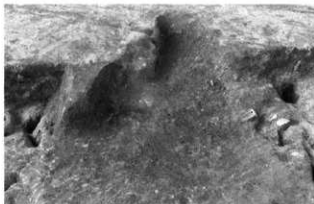
H SI-03 突棚・SK-04 (右上・南東より)



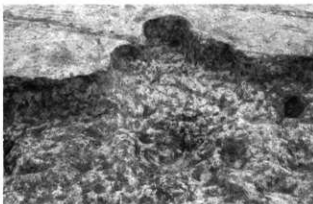
A SI-03 掘方・SK-04 (右上・南より)



B SI-03 カマド土層 (南東より)



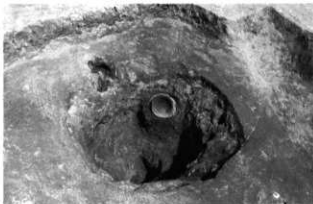
C SI-03 カマド完照 (南より)



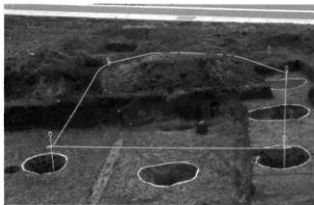
D SI-03 カマド掘方 (南より)



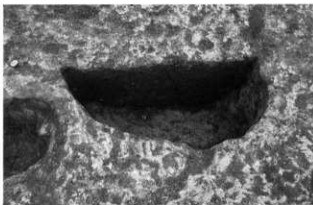
E SI-03 貯蔵穴土層 (西より)



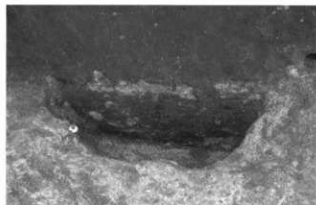
F SI-03 貯蔵穴 (南より)



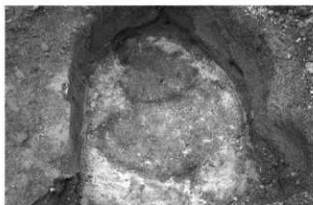
G SB-01 完掘 (南より)



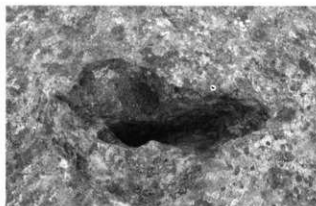
H SB-01 I-1土層 (南より)



A SB-01 イ・2土層 (南より)



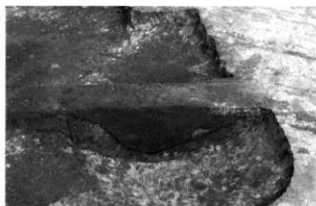
B SB-01 イ・3確認状況 (西より)



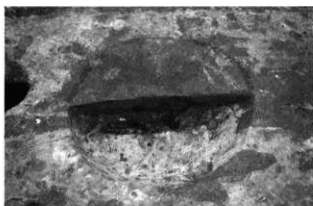
C SB-01 ロ・1土層 (南より)



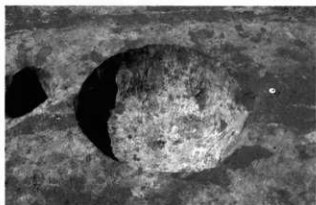
D SB-01 ハ・1土層 (南より)



E SK-04 土層 (南より)



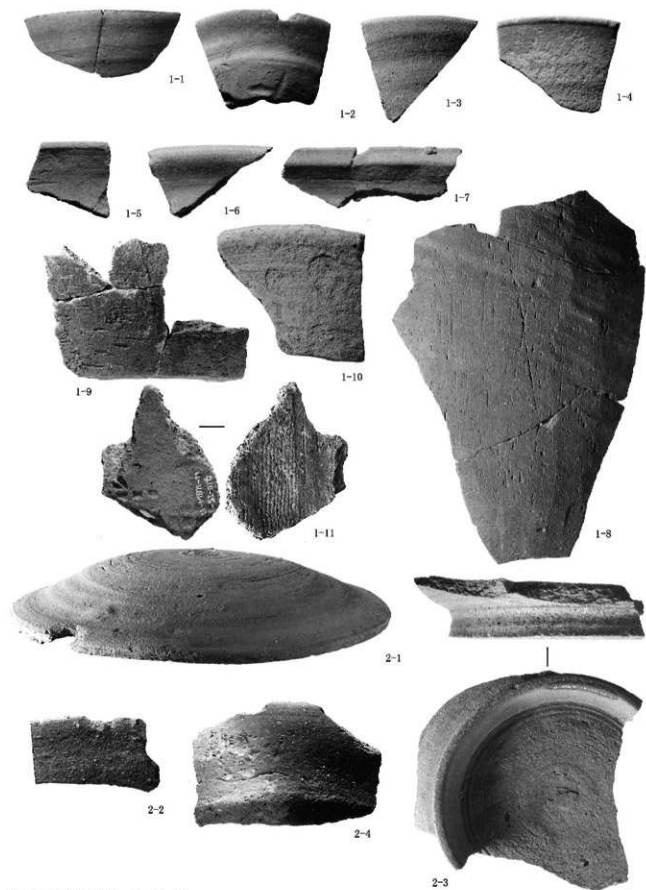
F SK-06 土層 (東より)

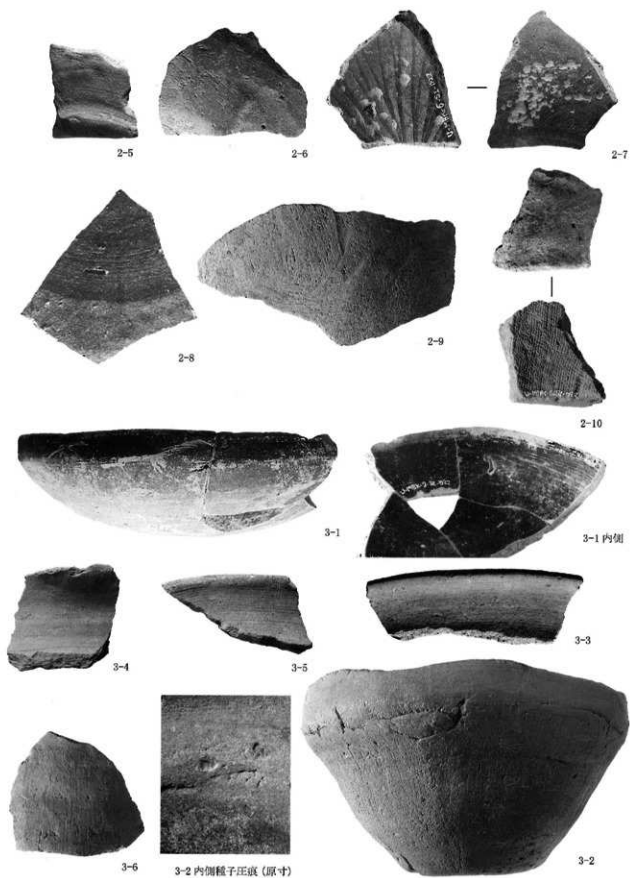


G SK-06 完掘 (東より)



H. 基本層序 (西より)





報告書抄録

ふりがな	もばらきたはらいせきびいく							
書名	茂原北原遺跡 (B区)							
副書名								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第84集							
編著者名	今平利幸・水野順敏・新井 潔							
編集機関	株式会社 日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	2013年12月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
茂原北原遺跡 (B区)	宇都宮市茂原町字北原	9201	4308	36° 28' 37"	139° 52' 37"	2013.8.26 ~ 2013.9.12	約 170㎡	集合住宅 の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
茂原北原遺跡	集落跡	古代	・ 竪穴住居跡 3軒 ・ 掘立柱建物跡 1棟 ・ 土坑 2基 ・ 小穴 1口		・ 土師器、須恵器、瓦		・ 竪穴住居跡の分布密度は高いが重複の無い。7世紀末～8世紀代の集落跡と考えられる。	

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第84集

茂原北原遺跡 (B区)

発行年月日 平成25年12月29日

編集 株式会社 日本竊業史研究所

〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112

TEL 0287-93-0711

発行 宇都宮市教育委員会文化課

〒320-8540 栃木県宇都宮市旭 1-1-5

TEL 028-632-2764

印刷 下野印刷 株式会社

〒320-0061 栃木県宇都宮市宝木町 1-28-11

TEL 028-622-6953